

## おわりに

「地域や人と人との間で伝承されてきた伝統芸能に、なぜアートマネジメントの視点が必要なのか」。これは、2010年頃、私が学会などで何度か寄せられた質問です。

その後、地域コミュニティや人と人とのつながりに支えられてきた伝統音楽・芸能の伝承は、2011年の東日本大震災、2020年の新型コロナウイルス感染拡大という、そのつながりを分断する二つの大きな出来事を前に変化を余儀なくされました。こうした中で、特に2020年以降、伝統音楽・芸能をめぐる国（文化庁）の政策においても従来の文化財としての保護以外に、担い手自身による社会への発信への支援などアートマネジメント寄りの視点が導入され始めました。

日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成という目的のもとで、2019年から6年間に亘り東京音楽大学で実施した二つの事業は、最終的に100名以上もの講師・関係団体の皆様のご協力をいただきました。前例がない伝統音楽・芸能分野のアートマネジメントの構築に向かって、実践現場と研究、行政と民間、伝統芸能・音楽の担い手とそれを応援する側、そして様々な分野の専門家が集い、またアートマネジメントという言葉が一般的でなかった時代からこの分野のアートマネジメントを開拓されてきた世代と、新たな技術を用いて積極的な活動をされている若い世代とが集う場ともなりました。

本事業のプログラムでは、立場や世代、そして伝承をする側・それを支える側といった不平等が生じやすい関係性を超えて、複眼的思考で相互に尊重し合うやり取りが多く見られました。そのやり取りを積み重ねながら、たくさんの皆様に多くのお力添えをいただいたことで、新たな発見と予期せぬ化学反応が次々と生まれ、6年間の途中からは、当初想定していた範囲を超えて事業が展開

していきました。

いま振り返ると、皆で集い、尊重し合いながらやり取りを積み重ねるプロセスこそが、日本とアジアの伝統音楽・芸能のアートマネジメントにとって重要なことなのだと思います。

6年間を通して本事業が成し遂げたことを一つ挙げるとしたら、それは、伝統音楽・芸能をめぐって、様々な立場の人たちがこれからの活動を考えるための土台を整え、誰もがこの分野のアートマネジメントを開拓できる、可能性に満ちた環境を社会に向けて開いたことです。多くの方に、本書を読みながらそれぞれの活動の展開にお役立ただけ嬉しく思います。

6年間の事業における取り組み、および本書の作成にあたっては、多くの皆様にご支援とご協力をいただきました。また本書の編集にあたっては寺田真由美さん、ひとま舎の菅生早代さんに大変お世話になりました。皆様にこの場をお借りして、心より御礼申し上げます。

伝承を担うフィールドからまなび、ともにつくり、  
地域へつなぐアートマネジメント人材育成事業

統括 福田裕美